

より伝わるようにすることで、 社会に様々なベネフィットを届ける。



織田 芳孝

YOSHITAKA ORITA

赴任地

 **インドネシア**
赴任地での職種(活動分野)
デザイン

兵庫県伊丹市

オリタ企画(個人事業主) / フォトグラファー

大学卒業後、JICA海外協力隊としてスリランカでサッカーの指導に携わる。帰国後、サッカーコーチを務めながらデザインを学ぶ。2005年、スマトラ島沖地震の支援のため、短期派遣でスリランカへ。その後、国内菓子メーカーに勤務。39歳までという年齢制限(当時)を目前に、再びJICA海外協力隊に参加。インドネシアへ赴く。

自身の技量を試す挑戦心と身軽さは、海外での経験が土台に。

フォトグラファーとして活動する織田さんは、撮影のほか、デザインや企画、コンテンツ制作などに関するコンサルタント業務もこなすマルチ広報マンだ。2度のスリランカ渡航の後、菓子メーカーにデザイナーとして就職。パッケージや販促ツールなどを制作。さらに、マネージャーとしてブランド開発、商品企画や店舗開発、Eコマースの運営、知財管理などに携わると同時に、種々の撮影業務も担当した。

インドネシアからの帰国後は、企業に属さずフリーランスの道を選ん

だ。それは自分自身の価値や技術を試したいという思いがあったのと、インドネシアでの活動を通じて自分で物事の是非を判断する責任と楽しさを知ったから。「世界は広くて狭い」現代社会において、会社や国という枠にとらわれず、クライアントとは異なる視点で商品やサービス、活動のベネフィットを世の中に発信し、人々の豊かな暮らしに貢献する。それが織田さんの仕事だ。

ギャップがない、ことが 一番のギャップだった。

任地は東部インドネシアの拠点、南スラウェシ州マカッサル市。同州中小企業協同組合局に新設されたパッケージセンターで、現地のパッケージデザインレベル向上に取り組んだ。中小企業が自社商品の持つ可能性を高めるため、法令遵守や経済性、安全性などを考慮したパッケージを中小企業が自ら考案する、またはデザイナーと協業して完成させることを目標に支援活動を進めた。一からのセンターの立ち上げだったが、理解ある上司と優秀な同僚に恵まれ、織田さんの活動は驚くほどギャップに悩まされることがなかった。センター開設から活動終了まで、支援を実施した企業は182を数えた。



コンサルティングの様子



パッケージを制作した企業と



マカッサルデザインコミュニティ立ち上げ

“良いデザイン”とは、を伝え、 一緒に考えていく。

織田さんが一番印象に残っている案件は、地方の講習会で出会った女性から相談された自然由来の材料でつくった洗顔剤のパッケージ。最初はあれもこれも言いたいというデザインだったが、伝えたいことを一緒に整理し、パッケージの形状も変更したところ、売上が倍になった。

織田さんの考える“良いデザイン”とは「目標を達成できるコミュニケーション手段。インドネシアでは、あなたの代わりに消費者に商品の魅力を伝えてくれるものと話していました」。

各地を回って講習会を行いつつ、インターンを受け入れるなどデザイン制作に関する様々な指導を行った。また、自身の任期終了後も見据え、デザイナー、印刷会社など外部人材や団体と連携し得るコミュニティを立ち上げた。織田さんが残した“良いデザイン”は、きっとインドネシア東部の中小企業の発展に資するだろう。



変更したパッケージ

世界の課題を実体験できたことは、 今に生きる大きな力に。

インドネシアは多民族多言語国家で、約300の民族、約700の言語が存在すると言われている。多くの民族が共生する中で、国が一つになるために「多様性の中の統一」という国是が掲げられている。織田さんは現地での生活を通して、様々なバックグラウンドをもつ人々が、色々な働き方、暮らし方をして、一つの社会を形成していることを目の当たりにした。言語や地域特性の違いという多様性を理解し、それをどうデザイン、商品開発に生かせるかを実体験できたことは大きな経験となった。また、日本でも世界でも解決すべき課題として事業活動と切っても切り離せないSDGs。インドネシアでその課題を間近で見たり感じたりできたことは、SDGsを具体的にイメージできる力となって織田さんの今に生きている。



目の前の人の方になることが、 社会や世界につながっていく。

帰国後もSNSを通じて、インドネシア時代の同僚からデザインに関する相談を受けたりするなど、インドネシアとのつながりを大切にしている織田さん。「現在、個人で事業を行っており、社会に対して企業のような大きなことはできません。しかし、私の経験を生かして発信していくというお手伝いはできと思っています」。一対一のつながりは一見すると小さいが、それが連なることで世界につながる。「私と関わった人たちはインドネシアとつながり、インドネシアの人々も私を通じて日本とつながっています。グローバルという言葉がありますが、まさにその視点で地域社会と関わりながら、私という存在が地域と地域、国と国をつなぐきっかけになれば良いと思っています」。

元上司に
聞く!



株式会社長崎堂
取締役副社長
荒木 志華乃さん

自分の与えられた仕事に妥協することなく、とことん極めるための努力や研究を怠らない人です。30代での仕事の取り組みを通じて、そして協力隊で得た経験から、以前の仕事に挑む際の近寄りやすい雰囲気も丸くなり、人との関わり方も相手に寄り添えるようになったと思います。誰にでも優しく、思いやりの心をもって接することができる人です。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 迷うより、まず挑戦してみてください。

社会がどんどん変化していく中で、JICA海外協力隊の経験はその変化に対応する力を身につける良い手段です。異国、異文化、新しい環境に身を投じることは不安もあるだろうし、大きな決断がいると思います。しかし、長い人生のうちのたった2年間のこと、とも考えられます。興味があって、タイミングも合えば、ぜひ飛び込んでほしい世界です。